

# アンケート調査から分析した北九州市立大学における 新入学生の意識の傾向

—大学進学動機・職業選択志向・地域コミュニティ意識から—

西出 崇\*・浅羽 修丈・石谷 百合加\*\*

## 1. はじめに

近年、大学組織内の状況をデータから客観的に把握し、それを教育改善や経営意思決定などに活用しようとする取り組みが進んでおり、IR (Institutional Research) という言葉とともに定着しつつある。IR の対象は多岐にわたるが、その中でも学生の状況を把握することは重要な課題である。しかし、大学が新しく入学してきた学生の特徴について把握していることは、実はあまり多くはない。当然のことながら、デモグラフィックな情報や入試結果については把握しているが、新入生の大学に対する期待や学習に対する姿勢、価値観など、彼らの意識や態度のあり方、キャラクターについての調査、分析は少ない。新入生アンケートは、その手がかりを得るための重要な手段である。本稿では、新入生オリエンテーション期間に実施したいくつかの新入生アンケートのデータを用い、2016年度の北九州市立大学における新入生の特徴について検討する。

学生の特徴といっても様々な側面があるが、ここでは利用可能なデータのうち、大学への進学動機、職業選択の志向、地域コミュニティに対する意識の項目に注目して分析を行う。これらの項目だけでは新入生の特徴を包括的に捉えることはできないが、新たに入学してきた学生の大学に対する認識の一端を知ることができる。

大学進学率が高まっている今日では、学問や専門知識の修得以外にも多様な進学動機をもって大学に入学する学生が増えている。大学進学の動機や目的は常に複合的なものであると考えられるが、そのような中で、今日の学生がどのような点にウ

---

\* 京都外国語大学 \*\*北九州市立大学地域共生教育センター

エイトを置いているのかを知ることは、大学教育のあり方を考えるうえで有益だろう。また、卒業した後の進路に関連して、将来の職業に対する価値観を知ることは、学生にとっての大学教育の意味や捉え方、キャリア教育などについて考えるための材料となる。そして、この大学への「入口」と「出口」についての意識や態度を合わせてみることで、新入生の大学に対する基本的な態度を知ることができるだろう。また、これらの項目とはややレベルが異なるが、地域コミュニティに対する意識の分析からは、特定の学部・学群の教育内容や教育理念と学生募集との関係を考える材料が得られるだろう。

ここで分析するように、学生の状況について調査・分析することは、大学の基本的な情報収集活動として重要である。しかし現状として、北九州市立大学では新入生に対して体系的かつ組織的な調査は実施されていない。本稿の分析は、いくつかの調査から得られたデータのうち利用可能な項目を用いて行われたものであるが、本来は大学としてこうした調査を企画すべきである。その議論は本稿の射程を超えるため今後の課題だとして、ここでは今後そのような調査を整備していくための手がかりを提供することも意図する。ここでの分析の主眼は、進学動機や職業志向からみえる新入生の特徴をデータに基づいて記述的に示すことであるが、そのような分析からどのような知見が得られるのか、その知見をどのように活用できるのかなどについても、分析成果を踏まえて議論する。そして、そこから体系的かつ組織的な学生調査の必要性を示し、本稿の結びにかえたい。

以下では、まず分析に用いるデータの概要と分析の方法を示す。その上で、大学への進学動機、職業志向、地域コミュニティに対する意識の順にそれぞれ分析と考察を行い、最後に体系的な学生調査の必要性やその活用のあり方について検討する。

## 2. 調査およびデータの概要と分析方法

分析に用いるデータは、北九州市立大学における2016年度の新入生を対象に実施されたいくつかの意識調査に基づいている。北方キャンパスに設置されている文系学部・学群については、入学後の新入生オリエンテーションの一環として行われるグローバル人材育成推進プログラム、および地域共生教育センターのガイダンスにおいて実施された新入生アンケートの一部の項目を分析に用いた。これらのアンケート調査は、基本的にはそれぞれのプログラムに対する新入生の意識を分析する

ために企画されたものであるが、調査の企画段階で両プログラムの担当者間で調整のうえ、新入生の全般的な特徴を把握できるような質問項目をいくつか含めてあり、本稿ではこれを分析に用いる。

ひびきのキャンパスに設置されている理工系学部については、基盤教育センターの協力を得て、入学式前に実施されるプレースメントテストにおいて新入生アンケートを実施した。調査項目の構成は、北方キャンパスの2つのプログラムで実施されたアンケートにおける新入生の全般的な特徴を分析するための項目に、いくつかの項目を加えたものである。調査の回収状況は以下のとおりである。

【表 1】新入生調査の回収状況

	回収数	回収率	入学者数
外国語学部	252	92.3%	273
経済学部	304	97.4%	312
文学部	240	96.0%	250
法学部	271	96.4%	281
国際環境工学部	270	98.5%	274
地域創生学群	111	98.2%	113
不明	2	-	-
合計	1450	96.5%	1503

ここで主に分析に利用するのは、大学進学動機、職業志向、および地域コミュニティに対する意識についてたずねた項目である。北方キャンパスの文系学部・学群のデータについては、2つのプログラムの新入生アンケートの回答を、学籍番号をキーに結合して利用する。また、ひびきのキャンパスの理工系学部については、地域コミュニティに対する意識をたずねる項目が含まれていないため、この項目については文系学部・学群のみが分析の対象となる。

大学進学動機をたずねる質問については、古市（1993）が提案した項目に若干の変更を加えたものである<sup>1</sup>。この質問は、2015年度のグローバル人材育成推進プロ

<sup>1</sup> 古市が提案した尺度は25項目から構成されているが、2015年度にグローバル人材育成推進プログラムのガイダンスにおいて実施した調査の際に「結婚に有利だから」という項目が作業上の不手際から抜け落ちている。抜け落ちた項目の内容や、年度間の比較などを考慮して、2016年度の調査でもそのまま24項目で調査を実施した。質問文については、2015年度の調査で利用したものをそのまま用いたが、項目の提示順序についてはランダムに並べ替えている。

グラムの新入生アンケートにも含まれており、西出・山崎・浅羽（2015）で分析を行っている。職業志向をたずねる質問は、筆者（西出）が過去に実施した調査で用いたオリジナルな項目に修正を加えたものである<sup>2</sup>。地域コミュニティに対する意識をたずねる質問は、石盛・岡本・加藤（2013）が提案するコミュニティ意識尺度の「短縮版」の一部を利用した。石盛らは、コミュニティ意識尺度の短縮版として12項目を提案し、そこから因子分析によって4つの因子を示している。ここでは、調査対象が学生であることや調査の趣旨、調査票の紙幅の関係を考慮し、石盛らが示す4因子のうち3因子に因子負荷が高い9項目を調査に用いた<sup>3</sup>。

以上のようなデータを用いて、本稿では北九州市立大学の2016年度の新入生の特徴について検討していく。分析に用いるのは、前述のように大学への進学動機、職業志向、地域コミュニティに対する意識の項目である。それぞれの項目は、因子分析を適用することを前提とした尺度であるため、まず因子分析によって因子の構造を検討する。その後、析出されたそれぞれの因子について学部・学群間で比較を行うことで、新入生の特徴を分析する。すなわち、因子分析によって新入生の大学への進学や将来の職業に対する意識の構造がどのようなものであるのかを探り、それを学部・学群間で比較することで各学部の新入生の特徴を分析する。ただしここで示されるのは、ある学年における学部・学群間の「相対的」な違いであり、結果を解釈する際には留意する必要がある。

### 3. 大学進学動機の因子構造

調査では「あなたが大学に進学した理由として、以下のそれぞれの項目はどれくらいあてはまりますか」として、大学進学動機について24の項目を挙げ、それぞれについて「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法で評定してもらった。この24項目について因子分析を適用した結果を表2に示す。

---

<sup>2</sup> 筆者（西出）が、地方部の自治体における若年層の定住意識の調査（西出，2016）において、将来の職業に関する意識をたずねる質問項目として作成したものを基に、本稿の共同執筆者と議論を重ねて作成した項目である。

<sup>3</sup> オリジナルの質問文は地域の居住者を対象としているが、本調査の対象は学生であるため文言を若干変更している。例えば、「いま住んでいる地域」は進学と同時に独り暮らしをしている場合があるため、「地元の地域」に変更を行っている。

アンケート調査から分析した北九州市立大学における新入学生の意識の傾向  
—大学進学動機・職業選択志向・地域コミュニティ意識から—

【表 2】 大学進学動機に関する因子分析

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	因子 6
先生の助言があったから	<b>0.880</b>	-0.002	-0.091	0.266	-0.030	-0.096
家族が勧めたから	<b>0.845</b>	0.000	-0.017	0.180	-0.028	-0.095
周囲の人が進学するから	<b>0.742</b>	-0.064	0.078	-0.062	0.070	-0.038
見栄があるから	<b>0.603</b>	0.146	0.139	-0.119	0.052	0.054
なんとなく	<b>0.598</b>	-0.113	-0.007	-0.208	0.024	0.032
社会にまだ出たくないから	<b>0.545</b>	0.029	0.078	-0.110	0.088	0.008
専門的技術を身につけたいから	-0.012	<b>0.932</b>	-0.075	-0.080	0.060	-0.035
専門的知識を修得したいから	-0.022	<b>0.904</b>	-0.069	0.077	-0.048	-0.041
学問研究をしたいから	0.127	<b>0.587</b>	-0.114	0.069	-0.192	0.136
大学に入るほうが就職に有利だから	-0.036	-0.162	<b>0.877</b>	0.088	-0.017	-0.082
学歴社会だから	0.129	0.029	<b>0.762</b>	0.054	-0.096	-0.066
高卒が嫌だったから	0.075	-0.023	<b>0.701</b>	-0.157	-0.127	0.157
希望する職業に就きたいから	-0.234	0.317	0.344	0.088	0.021	-0.037
視野を広げたいから	0.084	0.004	0.000	<b>0.773</b>	-0.039	0.129
広く教養を身につけたいから	0.062	0.165	0.026	<b>0.610</b>	-0.023	0.048
大学へのあこがれから	0.155	-0.072	0.172	0.395	0.213	0.195
やりたいことができるから	-0.095	0.227	0.151	0.325	0.102	0.053
解放感を味わいたいから	0.071	0.059	-0.093	-0.136	<b>0.844</b>	-0.021
クラブ・サークルに加入したいから	0.029	-0.119	-0.113	0.211	<b>0.741</b>	0.063
大学で遊びたいから	-0.002	-0.058	0.058	-0.090	<b>0.449</b>	<b>0.414</b>
資格を取得したいから	-0.099	0.314	0.093	-0.053	<b>0.418</b>	-0.179
多くの人と知り合いたいから	-0.183	-0.186	0.001	<b>0.459</b>	0.011	<b>0.771</b>
個性を磨きたいから	-0.022	0.151	-0.104	0.281	-0.041	<b>0.670</b>
異性の友人をみつけないから	0.106	0.102	-0.009	-0.139	0.061	<b>0.601</b>
因子間相関	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	因子 6
因子 1「無目的・同調」	1.000	-0.206	0.302	-0.384	0.275	0.358
因子 2「勉学志向」		1.000	0.370	0.585	0.248	0.279
因子 3「学歴志向」			1.000	0.184	0.444	0.443
因子 4「教養・視野」				1.000	0.169	0.131
因子 5「課外・遊び志向」					1.000	0.597
因子 6「出会い・自分磨き」						1.000

※ポリコリック相関係数を用いたカテゴリカル因子分析。因子抽出法は一般化最小二乗法を用い、プロマックス回転を行った結果のパターン行列を示した。  
※因子負荷量が 0.4 以上の項目を太字で強調した。また他の項目よりも相対的に因子負荷量が高い項目を破線で囲んである。

周知のとおり、因子分析は因子抽出法、回転法などによって結果が異なることがあり、因子数についても絶対的な基準はない。ここでは、応答変数が 5 件法の順序尺度ということから、変数間の相関係数の計算にピアソンの積率相関係数ではなく、順序尺度同士の相関係数として考案されたポリコリック相関係数を用いた<sup>4</sup>。因子

<sup>4</sup> ポリコリック相関係数とは、順序尺度の背後に仮定される連続値を推定し、その推定された連続値同士の相関係数を求める、順序尺度同士に適用できる相関係数である。ポリコリック相関係数を用いた因子分析を実行するために、R 言語の psych パッケージを用いた。

抽出法は、最尤法と一般化最小二乗法を検討したが、最尤法では不適解が生じたため、一般化最小二乗法を採用した<sup>5</sup>。また、回転法としてプロマックス回転を用いた。因子数についてもいろいろな基準が提案されているが、ここでは平行分析の結果に基づいて6因子構造を採用した<sup>6</sup>。大学進学動機については2015年度にも分析を行っているが（西出・山崎・浅羽，前掲）、今回とは異なる方法で因子分析を行っているものの6因子構造を採用しており、ある程度信頼性のある因子数であると考えられる。なお、尺度を提案した古市（前掲）の分析では、4因子構造を採用している。

以上を踏まえ、ここでの分析結果について、古市（前掲）の分析、および2015年度の北九州市立大学のデータに対する分析（西出・山崎・浅羽，前掲）を参照しながら、因子の解釈を進める。

表2における因子1に対して負荷量が高いのは、「先生の助言」「家族の勧め」「周囲の人が進学する」「見栄」「なんとなく」「社会にまだ出たくない」など、消極的な大学進学の動機である。古市の分析における「無目的・同調」という因子に概ね対応した因子であると考えられるが、本学の2015年度のデータの分析では「先生の助言」や「家族の勧め」が別の因子として析出されている。分析方法を変更しているため、この違いが分析方法に起因するものなのか、年度ごとの新入生の特徴の違いによるものかを直ちに判断することはできないが、いずれにしても消極的な進学動機であることには変わりない。そこで、古市に倣い因子1は「無目的・同調」としておこう。また、2015年度との違いについては気になる点ではあるが、稿を改めて検討したい。

因子2に対して負荷量が高いのは、「専門技術を身につけたい」「専門知識の習得」「学問研究」である。古市の分析では「勉学志向」、2015年度の分析では「学問・専門領域志向」に対応する因子であると考えられる。いずれにしても、大学への進学動機として、学問や専門知識を志向する因子であることから、ここでも古市に倣い「勉学志向」とする。

第3因子に対して負荷量が高いのは、「就職に有利」「学歴社会だから」「高卒が嫌だから」などである。古市の分析における「資格・就職」という因子と重なる部分も多いが、ここでは資格取得などの項目は別の因子への因子負荷が高いようであ

<sup>5</sup> 最尤法の計算途中で共通性が1を超える場合が発生した。なお、相関係数をピアソンの積率相関係数に変更して推定しても、同様の不適解が生じた。

<sup>6</sup> 6因子で全体の分散の55.7%を説明している。

る。2015年度の分析を参照すると、そこでの「学歴志向」とほぼ同じ項目であるため、そのまま「学歴志向」というラベルを採用する。将来の就職を考慮して、とにかく大学卒業という学歴自体を得ることが重要だとする進学動機の因子であると考えられる。この因子3については、先述の3つの項目以外に因子負荷の絶対値は低いが、まとまりとしては第3因子に含まれるであろう項目として「希望する職業に就きたいから」がある。学歴が希望する職業に就くために必要な要素として認識されているということだろう。また、この項目は「勉学志向」にも同程度の因子負荷を示す。希望する職業に就くためには、ただ学歴だけがあればよいということではなく、勉学において専門性を身につけることも必要であることが意識されているともいえる。

第4因子に負荷量が高いのは、「視野を広げたい」「広く教養を身につけたい」である。古市の分析では、これらは「勉学志向」を構成する項目となっているが、ここではこれとは別に独立した因子として析出されている。因子間相関を確認すると、因子2「勉学志向」と因子4の相関係数は0.585と比較的高い数値を示していることから、古市の「勉学志向」は、本稿では因子2「勉学志向」と因子4に分かれて検出されたものとみることができるだろう。他方で、因子4は2015年度の分析における「自己研鑽志向」と重なるところがあるが、因子を構成する項目がやや異なっているようである。因子4については、この2項目に加えて「大学へのあこがれ」と「やりたいことができる」の2項目で、相対的に他の因子に比べて第4因子への負荷量が高くなっている。これらを総合して考えると、大学で何かを学びたいという積極的な動機は感じられるものの、具体的な専門性や学問領域は定まっていない漠然とした意欲が感じられる。そこで、ここでは因子4を「教養・視野」と捉えておきたい。

因子5は、やや解釈が難しいように思われる。すなわち、「解放感を味わいたい」「クラブ・サークルに加入したい」「大学で遊びたい」など、勉学よりは遊びや課外の活動に力を入れることを大学進学の動機としている一方で、一見するとこれらとは相反するような「資格を取得したい」という項目の負荷量も比較的高い。因子負荷量の大きさからいえば、「解放感を味わいたい」「クラブ・サークルに加入したい」が因子を構成する中心的な項目であり、それに「大学で遊びたい」と「資格を取得したい」が付随するという構造になっているように見える。資格取得を除けば、課外活動と遊びの因子と考えられるため、暫定的に「課外・遊び志向」としておきたい。

これは、古市の分析における「享楽志向」や、2015年度の分析における「課外活動志向」と共通するところも多いが、構成する項目はやや異なるようである。やはり、「資格取得」の因子負荷の高さが解釈をやや困難にしている。

そこで少し視点を変えて、「資格取得」という動機の位置づけについて考えてみよう。因子間相関に注目すると、因子5は因子1「無目的・同調」よりも、はるかに因子3「学歴志向」との関係が強いことがわかる。課外活動や遊びは、本来あるべきはずの勉学に取り組み視野を広げるといった進学動機が相対的に乏しい者にとって、ある意味では主要な進学の動機といえるかもしれない。だがそれは、決して大学進学そのものが無目的であるわけではなく、最終的には大学卒業という学歴を手に入れて就職するということが視野にあることが、因子間相関から想像できる。

就職のために学歴を得ることを目的として大学に進学することは重要であるが、勉学に主要な関心があるわけではなく、大学生という自由な時間を課外活動や遊びに充てることを目的とした進学という動機の中で「資格取得」を位置づけて考えてみると、その意味が多少理解できるのかもしれない。すなわち、勉学によって専門知識を身につけることよりも、安易に将来の就職に役立ちそうな活動が資格取得であり、それは課外活動と遊びの一方で取り組んでおくことが、打算として必要だということではないか。なお、資格取得は因子2「勉学志向」にも、相対的に因子負荷が高いことから、「まじめ」に資格取得を進学動機として考えている部分もあるようである。

因子6に負荷量が高い項目は、「多くの人と知り合いたい」「個性を磨きたい」「異性の友人をみつけない」である。これらからは、異性も含めて多くの人に出会い人間関係を広げ、自分の個性を磨くことを求めて大学に進学するといった動機がうかがえる。ラベルの名称は難しいところであるが、そのまま「出会い・自分磨き」としておく。

最後に、因子間関係から進学動機の全体像を検討しておく。因子間相関の値が全般的に正の値を示すことから、負の値を示す項目にまず注目する。因子2「勉学志向」および因子4「教養・視野」と因子1「無目的・同調」との間に負の相関がみられることから、大学で何かを学びたいという積極的な態度と、目的が明確ではなく周囲同調的で消極的な態度とが、大学進学動機の1つの対立する軸を形作っているといえるだろう。しかし、それらは一直線に正負の軸を構成するほど明確な軸というわけではなく、緩やかな積極、消極の進学動機の軸であり、その軸上にそ

他の因子がいずれの方向にも関係しながら存在しているといったイメージだろうか。

このように、それぞれの因子を構成する項目の内容から因子の意味を解釈し、その因子間の関係から学生の進学動機の様子を構造的に捉えることができる。因子の構造が2015年度のデータとは異なっているが、この点は別途検討する必要があるだろう。因子の構造を年度間で比較することで、それぞれの学年の大学進学動機の構造的な違いが把握できるかもしれない。また、年度ごとのデータをプールして因子分析を行い、年度間で比較することも学年ごとの特徴を捉える有効な方法だろう。こうしたデータを蓄積し、年度間で比較検討することによって、より明確に学生の特徴を捉える資料となるだろう。この点については、今後の課題である。

#### 4. 大学進学動機からみる各学部の新入生の相対的な特徴

次に、前節の分析で明らかになった進学動機の因子を用いて、学部・学群ごとの

【表3】学部・学群、性別を要因とした大学進学動機の因子得点平均についての分散分析

因子1「無目的・同調」

	Sum Sq	Df	F value	p
(切片)	0.03	1	0.035	0.852
性別	0.03	1	0.029	0.865
学部・学群	21.23	5	4.363	0.001***
性別×学部・学群	11.70	5	2.405	0.035**
残差	1257.39	1292		

因子2「勉強志向」

	Sum Sq	Df	F value	p
(切片)	0.00	1	0.001	0.975
性別	0.00	1	0.001	0.974
学部・学群	64.33	5	13.659	0.000***
性別×学部・学群	6.73	5	1.428	0.211
残差	1216.99	1292		

因子3「学歴志向」

	Sum Sq	Df	F value	p
(切片)	1.03	1	1.038	0.308
性別	3.05	1	3.056	0.081*
学部・学群	9.32	5	1.872	0.096*
性別×学部・学群	5.74	5	1.153	0.330
残差	1287.15	1292		

因子4「教養・視野」

	Sum Sq	Df	F value	p
(切片)	1.52	1	1.657	0.198
性別	34.93	1	37.970	0.000***
学部・学群	21.73	5	4.724	0.000***
性別×学部・学群	10.25	5	2.228	0.049**
残差	1188.69	1292		

因子5「課外・遊び志向」

	Sum Sq	Df	F value	p
(切片)	0.33	1	0.354	0.552
性別	6.53	1	6.935	0.009***
学部・学群	46.73	5	9.929	0.000***
性別×学部・学群	12.13	5	2.577	0.025**
残差	1216.02	1292		

因子6「出会い・自分磨き」

	Sum Sq	Df	F value	p
(切片)	0.03	1	0.032	0.858
性別	10.98	1	11.088	0.001***
学部・学群	5.28	5	1.067	0.377
性別×学部・学群	2.86	5	0.578	0.717
残差	1279.68	1292		

※ Type III 平方和を用いた。  
※ p<0.01:\*\*\*, p<0.05:\*\*, p<0.1:\*

新入生の相対的な特徴の違いについて検討する。ここでは、進学動機の各因子の因子得点の平均値について、学部・学群および性別で比較することでそれぞれの学部・学群の特徴を検討する<sup>7</sup>。具体的には、学部・学群、性別および両者の交互作用を要因とする分散分析を行う。

表3に分散分析の結果を示す。進学動機の分布は、学部・学群や性別で差がみられることがわかる。以下では各因子について性別ごとに学部・学群の因子得点の平均値をプロットした図を示し、分散分析の結果を参照しつつ、必要に応じて多重比較の結果を踏まえて学部・学群の特徴を記述していく<sup>8</sup>。ただし、学部・学群と性別のすべての組み合わせについて検討すると記述が煩雑になりすぎるため、個別の差については具体的な関心に応じて別途分析を行うこととし、本稿では図を中心に学部・学群間の相対的な特徴を把握することを目的として記述を進めたい。

分散分析から、因子1「無目的・同調」では、性別によって有意な差はみられないが、学部・学群では有意な差が見られ、学部・学群と性別の交互作用も有意な効果がみられる。図1からは法学部、地域創生学群、経済学部の平均が高く、国際環境工学部や外国語学部が低いように見える。煩雑になるため詳細を示さないが、多重比較の結果も概ねこの関係を支持している。学部・学群と性別の交互作用も有意であるため単純主効果を検討すると、学部・学群内で性別に差がみられるのは経済学部のみである。また性別によって、学部・学群間の差のパターンがやや異なっているようである。国際環境工学部や外国語学部は、大学で学ぶ内容がある意味ではイメージしやすいといえるが、それがこれらの学部・学群への大学進学のための目的がはっきりしていることと関係があるのかもしれない。進学率が高まった今日では、大学進学に明確な目的を持たないまま進学する学生も増加しているように感じられる。この因子得点の高低に関わらず、大学は、受験生や学生にむけて教育内容やその意義、面白さをどう伝えていくのが課題だろう。

因子2「勉学志向」については、性別による差はなく学部・学群間にのみ差がみ

<sup>7</sup> 因子得点の計算方法はいくつも提案されているが、ここではR言語におけるpsychパッケージのfa関数でtenBergeオプションを指定した。因子得点を比較する群として、学部に加えて性別も検討するのは、古市(1993)に倣っている。本文で示すが、進学動機のあり方は一部で性別によって有意に異なっている。性差の扱いには慎重になるべきであるが、ここでは客観的な事実として違いを記述するに留める。

<sup>8</sup> 多重比較にはTukey-Kramer法を用いた。交互作用が観察された項目については、主効果の検定結果を踏まえつつ単純主効果を検討した。多重比較の詳細な結果については、紙幅の制約から掲載できないため、必要に応じて本文中で言及する。

られるようである。多重比較の結果から、外国語学部と国際環境工学部はその他の学部・学群よりも有意に平均値が高いようである。また文学部と経済学部との間にも有意な差がみられるが、その他の差は判然としない。因子間相関が負の値を示すことからわかるように、因子1「無目的・同調」と因子2「勉学志向」の分布は逆転した関係にある。先にも指摘したが、やはり外国語学部や国際環境工学部では、入学する前から大学で学ぶ内容や専門性がイメージされやすく、進学目的を明確に持ちやすいということだろうか。裏を返せば、この因子の値が低い学部・学群では、学生の学部・学群教育の内容に対する理解が進んでいないとも考えられる。相対的に値が低い学部・学群では、学部・学群教育の内容や対外的な打ち出し方、受験生への情報提供やコミュニケーションなど改善が必要なかもしれない。

因子3「学歴志向」は、全体として差があまりないように見える。分散分析の結果では、学部・学群および性別のいずれでも10%水準まで含めれば有意な差を検出できる程度である。多重比較の結果でも、明確な差といえるほどの学部・学群間の差はみつからない。性別では、女性の方が、平均値が若干高いようであるが、大きな差ではない。大学卒業という学歴を得ることが将来の就職に有利になるという進学の動機は、性別や学部・学群にかかわらず新入生に等しく共有された価値ということだろう。

因子4「教養・視野」は、分散分析において学部・学群、性別、および交互作用のいずれもが有意な値を示しており、図4からも明らかな特徴が観察できる。平均値が高いのは外国語学部、文学部、地域創生学群で、中間あたりに経済学部と法学部が位置し、国際環境工学部がそれよりもやや低い値のようである。性別では、女性の方が、平均が高いようである。また交互作用が有意なことが示すように男女で学部・学群ごとの分布のパターンが異なり、男女差が大きい学部もある。

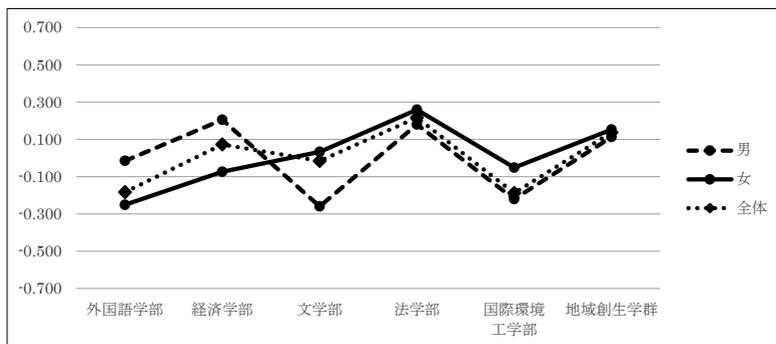
この因子は因子2「勉学志向」と因子間相関が高く、大きく見れば大学で何かを学ぶことを動機とした進学を示す因子である。したがって、因子2と因子4の学部・学群ごとのパターンは類似するところがあるが、国際環境工学部と地域創生学群のパターンが因子2とは異なる点が興味深い。理工系の学部である国際環境工学部は、専門性が比較的是っきりしており目的がある程度明確であることから、「教養・視野」といった進学動機が相対的に弱いのもかもしれない。他方で、地域創生学群の新入生は専門性よりも、幅広い視野や教養を身に付けたいと考えているようである。相対的な違いではあるが、大学の学びに対する姿勢として専門性と、ある意味では汎用

的で抽象的な教養に対する見方が、学部・学群の特性によって異なる点は興味深い。また、男女の意識の違いが大きい学部・学群があるところにも注目される。

因子5「課外・遊び志向」は因子の解釈がやや難しいところもあるが、分散分析では学部・学群、性別および交互作用ともに有意な値を示す。性別では男性の方が、平均値が高く、学部・学群では経済学部の値が他の学部・学群に比して大きいようである。また、国際環境工学部においては男女に差がみられる。結果として、男性では国際環境工学部と経済学部と有意な差はみられないが、女性では有意な差が観察される。あくまでも相対的な特徴という前提をあらかじめ強調したうえで、経済学部は因子1「無目的・同調」の得点が比較的高く、因子2「勉強志向」や因子4「教養・視野」が低い傾向にある一方で、この因子の得点が高くなっている点は留意が必要かもしれない。

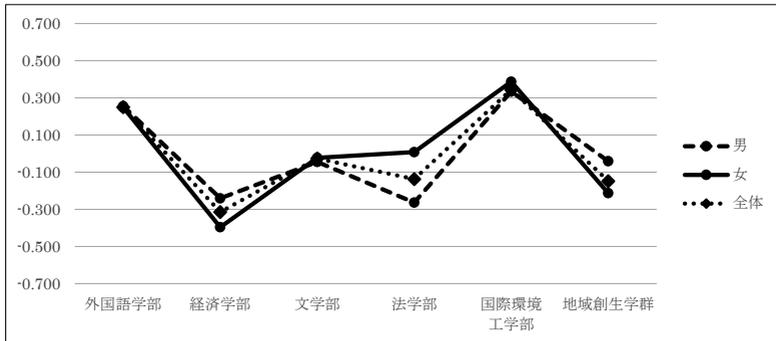
最後に因子6「出会い・自分磨き」では、性別でのみ有意な差があり、男性の方が、値が大きいようである。

進学動機を学部・学群および性別で比較することで、それぞれの学部・学群の新入生の相対的な特徴がある程度明らかになってきた。また、男女でも大学に進学する動機が異なっている部分があるところも見えてくる。このデータが直ちに具体的な施策につながるわけではないが、こうした特徴を把握することは学部・学群ごとの入試広報や選抜のあり方、教育のあり方を考える際の基礎資料になるだろう。この点については、他の項目を分析した後にもう一度議論したい。

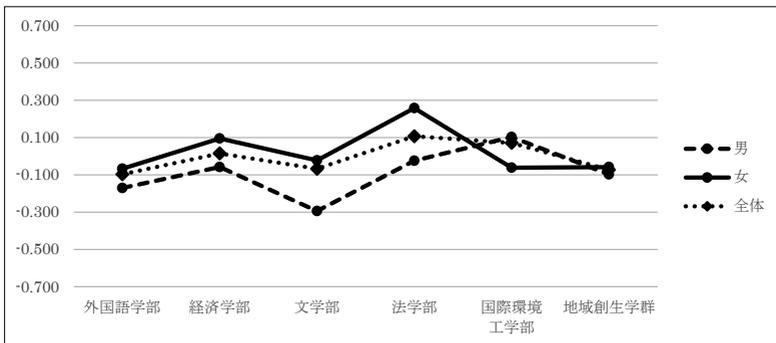


【図1】進学動機 因子1「無目的・同調」の学部・性別ごとの因子得点平均

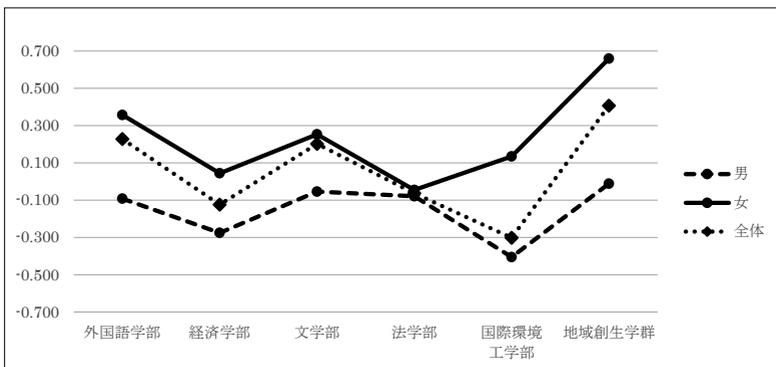
アンケート調査から分析した北九州市立大学における新入学生の意識の傾向  
 —大学進学動機・職業選択志向・地域コミュニティ意識から—



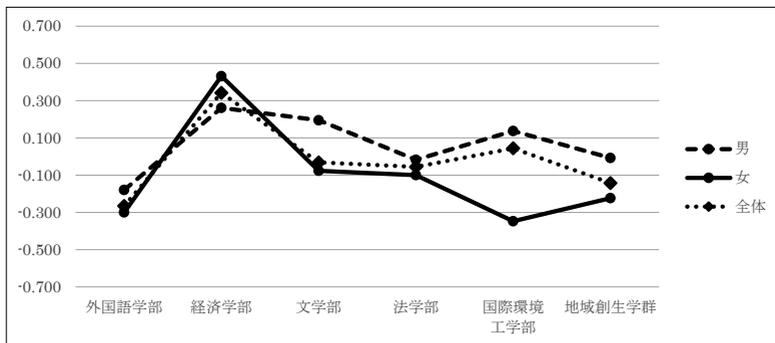
【図2】進学動機 因子2「勉学志向」の学部・性別ごとの因子得点平均



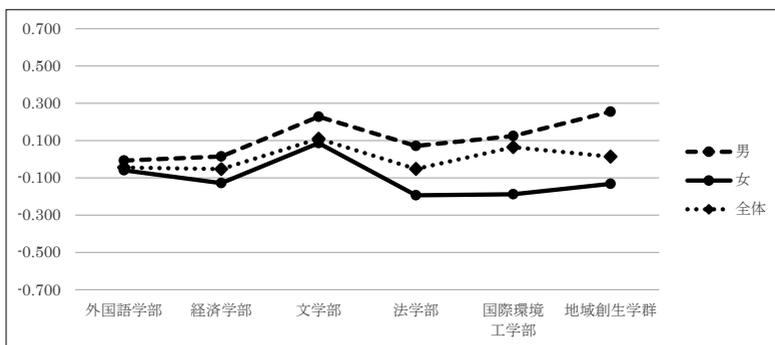
【図3】進学動機 因子3「学歴志向」の学部・性別ごとの因子得点平均



【図4】進学動機 因子4「教養・視野」の学部・性別ごとの因子得点平均



【図5】進学動機 因子5「課外・遊び志向」の学部・性別ごとの因子得点平均



【図6】進学動機 因子6「出会い・自分磨き」の学部・性別ごとの因子得点平均

## 5. 職業志向の因子構造

次に、職業志向について分析を行う。ここでの職業に対する考え方をたずねる項目は、本調査において独自に作成したものである。この尺度は、若者が職業に対してどのような価値を求めののかを探ることを目的に質問項目を構成している。尺度としてまだ十分に検討されたものではないが、想定した因子としては教育社会学等で用いられるアスピレーションの概念を参考に地位達成や職業達成的な志向、社会貢献的志向、やりがいや自己実現的な志向、安定や創造性の志向などである。これらの因子を念頭に、それぞれについていくつかの質問項目を検討し、ここでは17項目からなる質問項目を作成した。調査では17項目のそれぞれについて、仕事を選ぶときの重要性として「あまり重要ではない」から「かなり重要」までの5段階

【表 4】職業志向に関する因子分析

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	因子 6
高い専門的技術を必要とする職業	<b>0.790</b>	-0.047	-0.107	0.089	0.056	-0.053
人の上に立ち権力が大きい職業	<b>0.758</b>	0.182	-0.077	-0.047	-0.123	0.005
自立性の高い職業	<b>0.613</b>	-0.083	-0.039	0.111	0.203	-0.029
社会的に尊敬される職業	<b>0.432</b>	0.289	0.396	-0.047	-0.197	0.067
かっこいい職業	0.050	<b>0.897</b>	-0.015	0.148	0.002	-0.215
人に自慢できる職業	0.021	<b>0.627</b>	0.203	-0.126	0.122	0.061
のんびりした職業	-0.022	<b>0.585</b>	-0.202	-0.078	0.011	0.098
社会に貢献できる職業	-0.003	-0.131	<b>0.788</b>	0.157	0.014	0.015
誰かの役にたち感謝される職業	-0.166	0.200	<b>0.707</b>	0.057	0.036	0.048
自分自身がやりたい職業	-0.108	0.168	-0.060	<b>0.697</b>	0.029	0.072
自分の才能が発揮できる職業	0.228	0.002	0.031	<b>0.671</b>	-0.019	0.080
やりがいや達成感がある職業	-0.004	-0.062	0.362	<b>0.638</b>	-0.004	-0.057
創造性のある職業	0.045	0.014	-0.083	-0.025	<b>0.804</b>	0.024
新しいことに挑戦できる職業	-0.097	0.115	0.097	0.183	<b>0.672</b>	-0.073
責任が大きい職業	0.322	-0.082	0.174	-0.173	<b>0.498</b>	0.032
安定した職業	-0.059	-0.207	0.124	0.021	-0.060	<b>0.928</b>
高い収入が得られる職業	0.045	0.160	-0.149	0.066	0.094	<b>0.694</b>
因子間相関	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	因子 6
因子 1「職業達成」	1.000	0.537	0.439	0.225	0.587	0.328
因子 2「社会的体面」		1.000	0.293	0.119	0.371	0.552
因子 3「社会貢献」			1.000	0.466	0.482	0.208
因子 4「自己実現」				1.000	0.464	0.148
因子 5「新奇・創造」					1.000	0.192
因子 6「安定」						1.000

※ポリコリック相関係数を用いたカテゴリカル因子分析。因子抽出法は一般化最小二乗法を用い、プロマックス回転を行った結果のパターン行列を示した。  
※因子負荷量が0.4以上の項目を太字で強調した。

で評定してもらった。

ここでも、先に検討した進学動機と同様の方法で因子分析によって因子構造を探り、それらを学部・学群および性別で比較する<sup>9</sup>。表4に職業志向の17項目に対して因子分析を適用した結果を示す。試行的な質問項目であるが、因子分析の結果は比較的うまく単純構造となっている。

それでは、それぞれの因子の内容を検討していく。因子1に負荷量が高い項目は「高い専門性」「人の上に立ち権力が大きい」「自立性」「社会的尊敬」であり、これらからは自立して専門性を生かし立身出世するような志向が感じられる。わかりやすい地位達成や職業達成のアスピレーションの因子だと考えられることから、「職

<sup>9</sup> 因子数の決定方法、因子抽出法、回転法は先の進学動機の分析とすべて同じ方法を用いた。  
6 因子で全体の分散の61.5%が説明される。

業達成」としておこう。

因子2の負荷量が高いのは「かっこいい」「自慢できる」「のんびり」などの項目である。前二者は社会的な体面や面子を意識した項目であるが、これに「のんびり」が加わるためやや解釈に戸惑うが、社会的な体面を重視する一方で、働き方としては「のんびり」がよいという都合のよい考えが合わさったものということだろうか。「のんびり」の位置づけにはやや注意しつつ、因子2は「社会的体面」としておく。この因子は、因子1「職業達成」といった上昇志向的の価値や、因子6の「安定」や「高収入」とも相関が高い。基本的には職業達成的な志向であるが、内容が伴っていないアスピレーションといったところだろうか。

因子3の内容はわかりやすい。因子負荷が高い項目は「社会貢献」「他者に役立つ」の2つであり、そのまま「社会貢献」でよいだろう。

続いて、因子4に対して因子負荷が高いのは「自分がやりたい職業」「やりがいや達成感」「才能の発揮」といった項目である。この因子も解釈が比較的容易で、自分自身の希望した職業で、やりがいや達成感を求める志向であることから、「自己実現」の因子とする。

因子5に対して因子負荷量が高い項目は、「創造性」「新しいことに挑戦」「責任」である。同じことの繰り返しではなく、何か新しいことに創造的に取り組める仕事を志向する因子と考えられることから、「新奇・創造」とする。新しいことに取り組むといった志向の因子に「責任」が含まれている点は興味深い点であるが、ここの責任は自律性を意味すると考えられる。

最後に因子6は「安定」や「高収入」といった項目で因子負荷量が高いことから、「安定」の因子とする。収入の高さが因子1「職業達成」や因子2「社会的体面」に含まれるのではなく、安定と結びついている点は現代の若者の意識を特徴づける要素といえるかもしれない。地位や職業達成としての高収入ではなく、安定した生活の基盤としての高収入という考え方を持っているとするれば、ややステレオタイプな見方ではあるが、かつてとは若者の価値観が変化してきていることを示唆しているのかもしれない。

これらを踏まえて、因子間の相関から全体像をみておく。いずれの因子間にも負の相関は見られないことから、それぞれの因子ないしは項目は、大枠では職業選択において同じ方向に向かって重要だと考えられているようである。その中で、因子2「社会的体面」と、因子3「社会貢献」および因子4「自己実現」との相関や、因

子5「新奇・創造」と因子6「安定」との相関が相対的に低く、これらはやや方向性が異なった志向であることがうかがえる。

以上のように、総じて比較的解釈がしやすい因子構成が観察できることがわかる。項目の妥当性や、因子を構成する項目数など改良の必要はまだあるが、試作的な項目としてまずは十分な内容だと考えてよいだろう。

## 6. 職業志向からみる各学部・学群の新入生の相対的な特徴

この職業志向の因子を用いて、各学部・学群の特徴を検討する。分析方法は進学動機の際と同様に、学部・学群、性別および両者の交互作用を要因として分散分析を行い、学部・学群や性別による因子得点の平均値の差から考察を進める。

分散分析から、因子1「職業達成」の因子得点の平均値は性別によって有意に異なるが、学部・学群間では差はみられないようである。図7からわかるように、男性の方が値が高い。職業において立身出世し、職業達成を目指すアスピレーション

【表5】学部・学群、性別を要因とした職業志向の因子得点平均についての分散分析

因子1「職業達成」

	Sum Sq	Df	F value	p
(切片)	0.26	1	0.279	0.597
性別	28.18	1	29.799	0.000***
学部・学群	8.64	5	1.828	0.104
性別×学部・学群	5.79	5	1.225	0.295
残差	1239.04	1310		

因子2「社会的体面」

	Sum Sq	Df	F value	p
(切片)	0.13	1	0.127	0.721
性別	16.90	1	17.218	0.000***
学部・学群	19.30	5	3.934	0.002***
性別×学部・学群	4.73	5	0.965	0.438
残差	1285.48	1310		

因子3「社会貢献」

	Sum Sq	Df	F value	p
(切片)	0.00	1	0.003	0.960
性別	8.31	1	8.423	0.004***
学部・学群	15.66	5	3.174	0.007***
性別×学部・学群	4.77	5	0.967	0.437
残差	1292.81	1310		

因子4「自己実現」

	Sum Sq	Df	F value	p
(切片)	0.28	1	0.289	0.591
性別	1.90	1	1.943	0.164
学部・学群	33.33	5	6.831	0.000***
性別×学部・学群	9.62	5	1.971	0.080*
残差	1278.31	1310		

因子5「新奇・創造」

	Sum Sq	Df	F value	p
(切片)	0.72	1	0.733	0.392
性別	0.02	1	0.020	0.887
学部・学群	39.12	5	8.018	0.000***
性別×学部・学群	6.71	5	1.376	0.231
残差	1278.24	1310		

因子6「安定」

	Sum Sq	Df	F value	p
(切片)	5.52	1	5.712	0.017**
性別	4.16	1	4.303	0.038**
学部・学群	35.08	5	7.259	0.000***
性別×学部・学群	21.68	5	4.486	0.000***
残差	1266.12	1310		

※ Type III 平方和を用いた。  
 ※ p<0.01:\*\*\*, p<0.05:\*\*, p<0.1:

は、男性の方が強いようである。

因子2「社会的体面」の因子得点の平均値は、学部・学群および性別のいずれでも有意な差がみられるが、交互作用は有意ではない。性別では、男性の方が職業において社会的体面を重視する傾向にあるようである。多重比較の結果、学部・学群では外国語学部、経済学部、法学部の3学部と国際環境工学部との間に有意な差がみられる。入学直後の段階では、理工系の学部の学生は文系の学部の学生よりも、職業における社会的体面を重要視していないようである。理工系の学生の就職においては、専門知識や技術がはっきりしているため、相対的に「体面」といったあまり実質のないものにはこだわらないのかもしれない。理工系と文系では、入学直後でも職業に対する意識に差があることがうかがえる。

因子3「社会貢献」では、学部・学群および性別によって因子得点の平均値に有意な差がみられるが、交互作用は有意ではない。性別については、女性の方が社会や他者に貢献するような職業を志向する傾向があるようである。多重比較の結果では、地域創生学群に対して経済学部、文学部、国際環境工学部の値が有意に小さいことが観察される。地域創生学群の学生は、社会貢献的な志向によって特徴づけられるといえるだろう。このような志向は、地域創生学群の学生募集方針と方向性が一致しているようにみえる。

因子4「自己実現」の因子得点の平均は、性別で有意な差は見られないが、学部・学群では有意な差がみられ学部・学群と性別の交互作用の効果も有意である。学部・学群間の差は、外国語学部、国際環境工学部、地域創生学群の値が相対的には高く、法学部が低いようである。その間に、経済学部と文学部が位置し、文学部の方がやや値が高い。学部・学群で平均してみるとこのような分布になるが、学部・学群によって性差がみられ、そのパターンが大きく異なっている。単純主効果の検定で学部・学群内の性差がみられるのは、経済学部と法学部であり、いずれも男性の値が低い。他方で、統計的には有意ではないが、文学部はこの2学部とは男女の値が逆転している<sup>10</sup>。全体としてみれば女性は学部・学群間であまり差はないが、学部・学群によって男性の意識は異なっているようである。法学部や経済学部の学生は、因子1「職

---

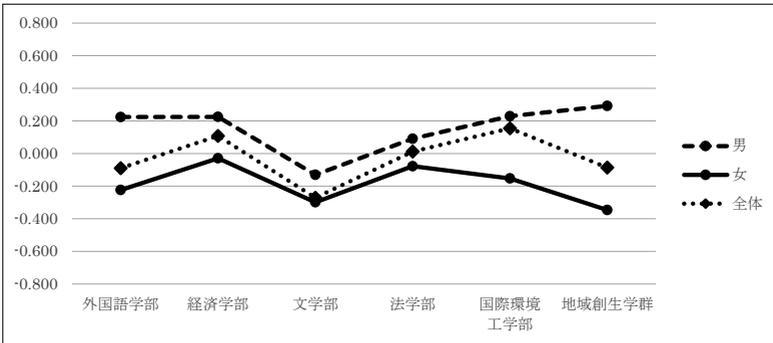
<sup>10</sup> これまでの分析でも、文学部は図では性別によって差があるように見えるが、多重比較などでは有意な差は検出されない。これは、文学部の男性の人数が少ないため、誤差が大きくなり統計的に有意な差が検出できないことが1つの要因である。統計的に有意な差ではないとしても、差のパターンに注目しておくことは有益であろう。

業達成」の志向が比較的高いことなどから考えれば、職業選択において自己実現よりも職業的達成の方が重要だということだろうか。これらの学部・学群間の違いは、将来の就職を念頭においた学部・学群選択という側面を考慮すれば、ある程度納得できる結果ではある。

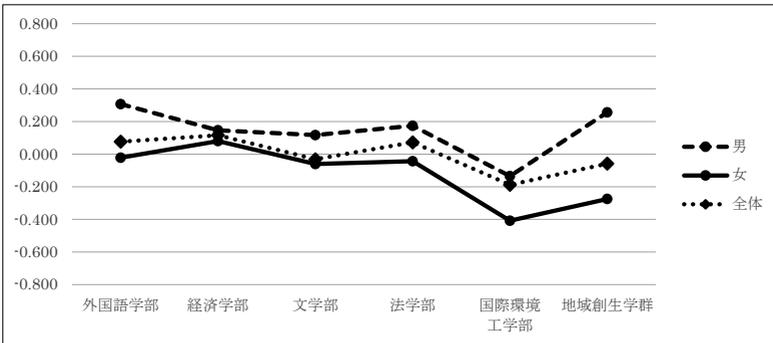
因子5「新奇・創造」の因子得点は、学部・学群間にのみ有意な差がみられる。創造性や新しいことに挑戦的な志向は、学部・学群選択の志向と重なっているといえるのかもしれない。この因子の得点が高いのは、地域創生学群や国際環境工学部、外国語学部であり、これらに対して経済学部や法学部の得点が低くなっている。相対的な位置づけの違いであるため、前者が新しいことに挑戦的であるのか、後者が保守的であるのかは大学全体の学生の特性によるが、経済学部や法学部の学生が職業選択に対して相対的に保守的志向を持っているようである。学生が学部・学群を選択する際にも、そのような学部・学群イメージが影響しているのだろう。

因子6「安定」は分散分析において、学部・学群、性別および両者の交互作用ともに有意な値となっている。図12では、学部・学群の平均的な値にはあまり差がみられないようであるが、外国語学部と経済学部および法学部との間には有意な差があるようである。性別による違いは全体的にみられるものではなく、交互作用があり一部の学部・学群の顕著な差が影響しているようである。学部・学群内で性差がみられるのは文学部と法学部であるが、図12からも明らかのように文学部の男性の値が顕著に低い。文学部の男性は、職業において収入の高さや安定といった点にはあまり価値を見出さない傾向にあるようである。しかし、因子5「新奇・創造」志向が高いわけではなく、因子4「自己実現」志向が強いことが特徴的である。やりがいを重視することが、文学部の男性の特徴といえる。他方で、大きな差がみられるわけではないが、経済学部や法学部はこの因子の値が高い。これは、因子5「新奇・創造」の考察で指摘した点と同様に、職業に対する保守的な志向といえるだろう。

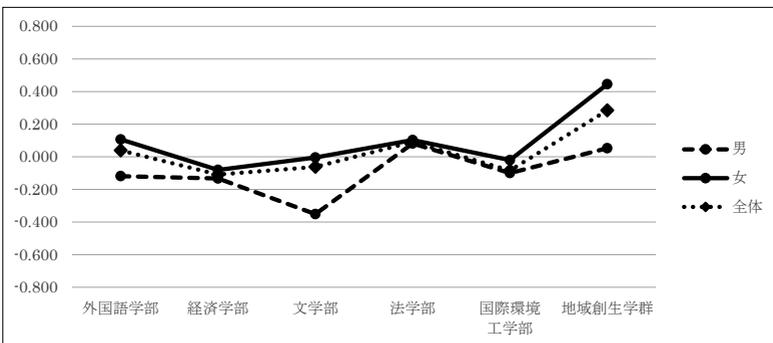
このように、職業志向の因子を学部・学群や性別で比較することで、それぞれの学部・学群の新入生の相対的な特徴がある程度明らかになる。ここで観察された特徴は、ある意味ではそれぞれの学部・学群に我々が持つイメージと概ね一致している。例えば、伝統的な経済学部や法学部の学生には保守的な職業志向が垣間見え、特徴的な教育内容を有する地域創生学群の社会貢献志向や挑戦的志向の高さも直観に一致する。大学進学における学部・学群や学問領域の選択では、卒業後の職業が意識されるのは間違いないだろう。それぞれの学部・学群の新入生の職業志向



【図7】職業志向 因子1「職業達成」の学部・性別ごとの因子得点平均

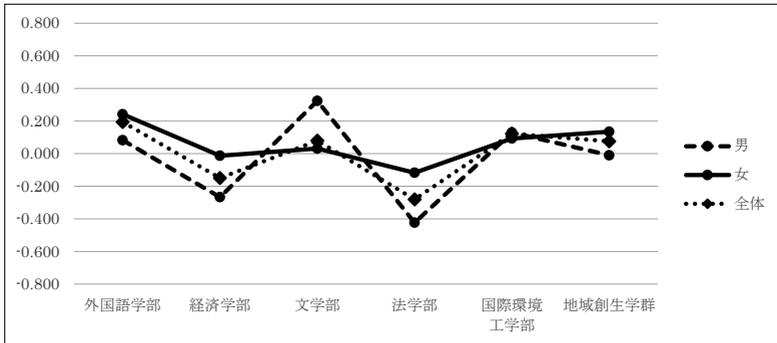


【図8】職業志向 因子2「社会的体面」の学部・性別ごとの因子得点平均

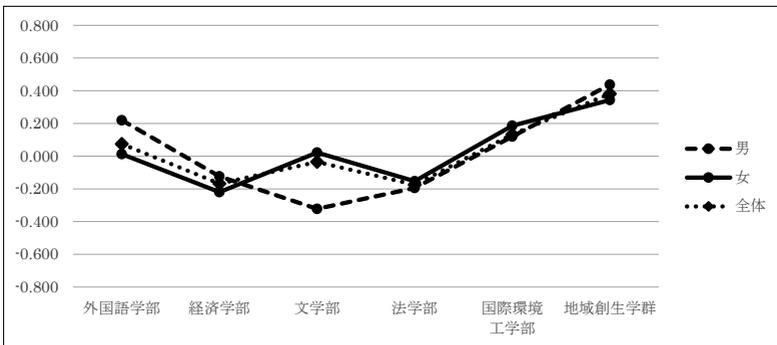


【図9】職業志向 因子3「社会貢献」の学部・性別ごとの因子得点平均

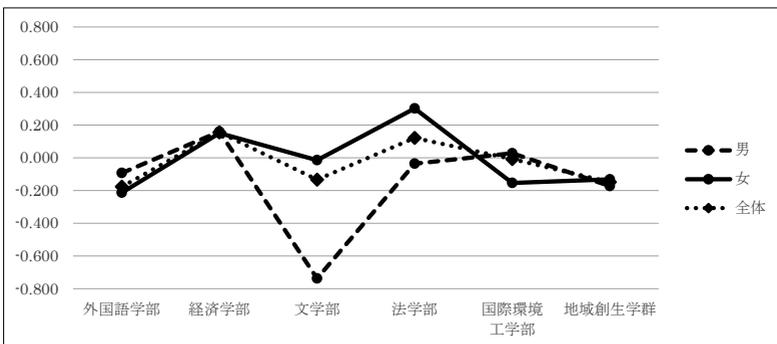
アンケート調査から分析した北九州市立大学における新入学生の意識の傾向  
 —大学進学動機・職業選択志向・地域コミュニティ意識から—



【図 10】 職業志向 因子 4「自己実現」の学部・性別ごとの因子得点平均



【図 11】 職業志向 因子 5「新奇・創造」の学部・性別ごとの因子得点平均



【図 12】 職業志向 因子 6「安定」の学部・性別ごとの因子得点平均

の差は、そうした意識が反映されたものだといえる。そしてそれは、実情はどうであれ受験生たちの間に形作られた北九州市立大学の各学部・学群のイメージそのものでもある。こうしたイメージが、大学として募集しようとする学生像と一致しているのかは検証されるべき課題ではないだろうか。

進学動機と職業志向の分析を終えたところで、両者の各因子の関係について若干の検討を行っておく。表6に進学動機と職業志向の各因子間の相関係数をまとめた。さほど大きな値ではないが、全般的に有意な相関を示す組み合わせが多い。進学動機が大学への「入口」の意識であるとすれば、職業志向は「出口」の意識であると考えられるが、出口に対する意識が入口における意識と関係したものであることがうかがえる。

個別に関係をみると、進学動機の「学歴志向」因子と職業志向の「安定」因子の相関が強い。とにかく安定した職業に就きたいという志向が、大学卒業という学歴が就職に有利に働くからという進学動機と結びつくことは納得しやすい。進学動機の「教養・視野」因子は、職業志向の「社会貢献」因子、「自己実現」因子との相関が比較的強い。「教養・視野」因子は、大学で何かを学びたいという積極的な志向であるが、「勉学志向」と比べると学問領域や専門性が特定化されない、ある意味では抽象的な意欲であった。こうした意欲は、将来の職業として社会貢献や自己実現を志向するようである。専門性に対する関心が定まらない中で、社会貢献や自己実現など、やや抽象的で耳心地の良さそうな職業に意識が向くのだろうか。

これらの他にも、それほど相関は強くないが興味深い関係も観察できる。例えば、進学動機における「無目的・同調」因子は、職業志向の「社会的体面」とは正の相関がみられるが、「自己実現」とは負の相関がみられる。無目的な進学は具体的な職業イメージが持てないため、就職においても具体的にやりたいことがなく「自己実現」因子とは負の相関を見せるが、見栄などの進学動機とも重なって職業においても社会的な体面が相対的に重視されるのかもしれない。

このように、それほど強い関係ではないが、進学動機のあり方が将来の就職に対する意識にも影響を及ぼしていることがうかがえる。しかし、これは入学直後の新入生の意識である。進学動機のあり方はどうであれ、今後の4年間の大学での教育によって職業志向を「良い」方向に導くこともできるだろう。そうしたキャリア教育の展開を考えるうえで、入学時点での職業観を進学動機との関係で検討しておくことは有益ではないだろうか。紙幅の都合から、ここではこれ以上の議論を行うこ

とはできないが、こうしたデータの1つの活用のあり方として言及しておきたい。

【表6】学部・性別を要因としたコミュニティ意識の因子得点平均についての分散分析

職業志向	進学動機					
	無目的・同調	勉学志向	学歴志向	教養・視野	課外・遊び志向	出会い・自分磨き
職業達成	-0.003	0.168***	0.022	-0.089***	0.038	0.078***
社会的体面	0.124***	-0.047	0.105***	-0.118***	0.128***	0.108***
社会貢献	-0.045	0.066**	-0.002	0.300***	-0.018	0.041
自己実現	-0.182***	0.119***	0.044	0.235***	0.046	0.056*
新奇・創造	-0.065**	0.164***	-0.091***	0.120***	-0.011	0.116***
安定	0.012	-0.041	0.300***	-0.011	0.076***	0.002

※進学動機と職業志向の因子間相関。  
※ p<0.01: \*\*\*, p<0.05: \*\*, p<0.1: \*

## 7. コミュニティ意識からみる各学部・学群の新入生の相対的な特徴

地域コミュニティ意識は、北方キャンパスの文系学部・学群の学生のみ質問しているため、ひびきのキャンパスの国際環境工学部を除いた分析になる。この項目は石盛真徳・岡本卓也・加藤潤三（2013）が提案したものの一部であるが、因子分析の結果<sup>11</sup>、この研究と同様の因子構造を得ることができた。したがって、因子のラベルは先行研究のものをそのまま使い、因子1から順に「愛着」「連帯・積極性」「他者依頼」とする。この因子を用いて、引き続き学部・学群の特徴を検討する。これまでと同様に、学部・学群、性別および両者の交互作用を要因として各因子の因子得点平均について分散分析を行う。

コミュニティ意識の学部・学群間比較の結果は、ある程度予想できるものである。進学動機や職業志向と異なり、コミュニティ意識の質問項目は、特定の学部・学群の教育内容と深くかかわるものであり、その学部・学群について顕著な特徴がみられると考えられる。したがって、ここでの分析は相対的な学部・学群の特徴を検討するというよりも、特定の学部・学群の特徴を検証するといった色合いが強くなる。

因子1「愛着」は、学部・学群および性別で有意な差がみられるようである。まず性別では、女性の方が値が高く、地域に対する愛着が強いようである。学部・学群比較では、学群の教育コンセプトから予想される通り地域創生学群の値が高く、

<sup>11</sup> ここでの因子分析は、進学動機、職業志向と同様の方法で実施しており、先行研究の方法とは異なる。分析方法が異なっても同じ因子構造が得られたことから、十分に信頼性の高い尺度だと考えられる。

【表 7】コミュニティ意識に関する分散分析

	因子 1	因子 2	因子 3
地元の地域に、誇りとか愛着のようなものを感じている	0.921	-0.056	0.059
住んでいても、地域にはさして関心や愛着といったものはない	-0.672	0.093	0.223
人から地元の悪口をいわれたら、自分の悪口をいわれたような気になる	0.565	0.117	0.150
地域でのボランティアなどの社会活動に参加したい	-0.111	0.831	-0.036
住み良い地域づくりのために自分から積極的に活動していきたい	-0.029	0.747	-0.018
地域のみなどと何かをすることで、自分の生活の豊かさを求めたい	0.150	0.588	0.035
地域での環境整備は、行政に任せておけばよい	0.050	0.040	0.822
地域をよくするための活動は、熱心な人たちに任せておけばよい	-0.001	-0.092	0.706
自分の地元で住民運動が起きても、できればそれに関わりたくない	-0.075	-0.073	0.402
因子間相関			
因子 1「愛着」	1.000	0.625	-0.475
因子 2「連帯・積極性」		1.000	-0.556
因子 3「他者依頼」			1.000

※ポリコリック相関係数を用いたカテゴリカル因子分析。因子抽出法は一般化最小二乗法を用い、プロマックス回転を行った結果のパターン行列を示した。  
 ※因子負荷量が0.4以上の項目を太字で強調した。

【表 8】学部・学群、性別を要因としたコミュニティ意識の因子得点平均についての分散分析

因子 1「愛着」					因子 2「連帯・積極性」				
	Sum Sq	Df	F value	p		Sum Sq	Df	F value	p
(切片)	0.56	1	0.580	0.447	(切片)	3.09	1	3.514	0.061 *
性別	6.74	1	6.979	0.008 ***	性別	10.21	1	11.620	0.001 ***
学部・学群	20.45	4	5.295	0.000 ***	学部・学群	79.55	4	22.630	0.000 ***
性別×学部・学群	5.24	4	1.357	0.247	性別×学部・学群	2.06	4	0.585	0.674
残差	1037.79	1075			残差	944.78	1075		

因子 3「他者依頼」				
	Sum Sq	Df	F value	p
(切片)	0.01	1	0.006	0.938
性別	9.62	1	10.075	0.002 ***
学部・学群	18.16	4	4.755	0.001 ***
性別×学部・学群	20.54	4	5.378	0.000 ***
残差	1026.45	1075		

※ Type III 平方和を用いた。  
 ※ p<0.01: \*\*\*, p<0.05: \*\*, p<0.1: \*

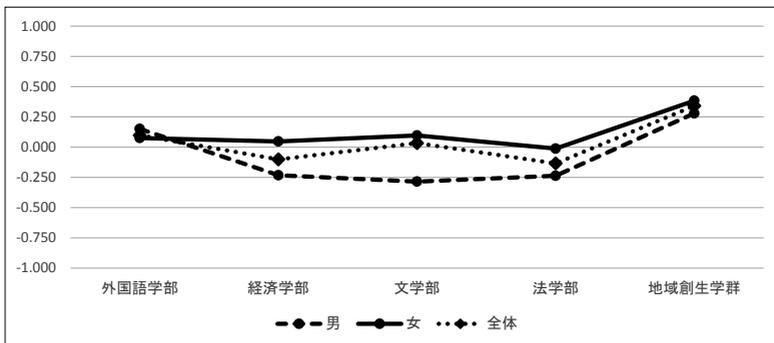
多重比較では外国語学部を除く他の3学部よりも有意に値が大きい。ただし、地域に対する愛着についてはさほど大きな差はみられるわけではない。地域に対する愛着と、進学する学部・学群とは基本的には独立であるが、地域に対する愛着の強さが地域貢献的な志向につながり、地域創生学群のような学群を選択しているのだら

う。

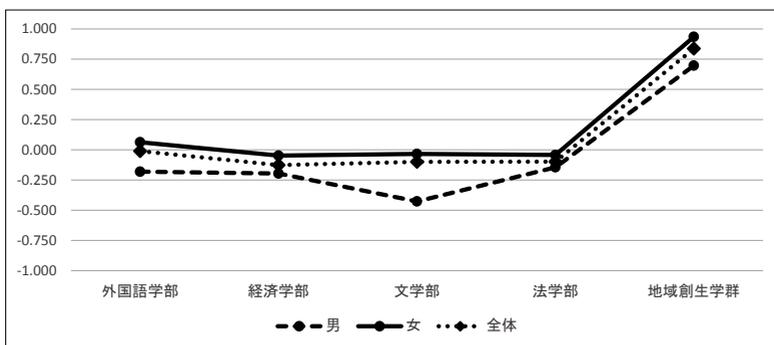
因子2「連帯・積極性」では、学部・学群および性別で有意な差がみられる。ここでも、女性の方が値が高いことがうかがえる。学部・学群については、予想される通り地域創生学群の値が他の学部と比較して顕著に高いことが分かる。この因子は、地域コミュニティに対する積極的な活動性や連帯を示すもので、地域創生学群が募集しようとする学生像と一致している。すなわち、地域創生学群の教育コンセプトは受験生に適切に理解されており、学群として求める新入生を適切に募集することにある程度成功しているといえる。

因子3「他者依頼」についての分散分析では、学部・学群、性別および交互作用のいずれでも有意な値となっている。因子の内容としては、他の2因子とは負の相関がみられることからわかるように、積極性や愛着とは相反する志向である。そのため、性別については前の2因子とは逆に男性の方が値が高く、学部・学群では地域創生学群の値が低くなっている。交互作用について検討すると、文学部以外は学部・学群内で性別によって差がみられるため、両者で学部・学群間の差も異なっている。興味深いのは、地域創生学群では男性の値が高くなっている点で、他の学部と変わらない水準である。地域創生学群の学生の特性が性別によって決定的に異なっているというわけではないが、このようなところに男女の違いがある点は認識しておいてよいだろう。

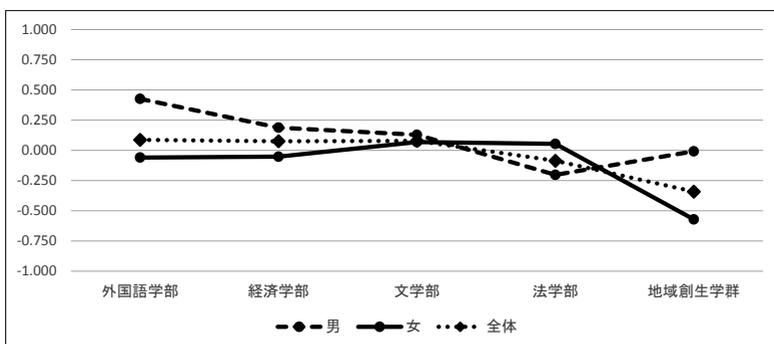
以上のように、ここでの分析は項目の性質上、地域創生学群の特徴についてコミュニティ意識から検証するというかたちで進めた。地域創生学群の学生を特徴づけるのは、地域コミュニティに積極的に関与する志向であり、それは学群の教育内容と一致したものであるといえる。これは、入試広報や学生の選抜が適切に行われていることを示す1つの根拠となろう。



【図 13】コミュニティ意識 因子 1「愛着」の学部・性別ごとの因子得点平均



【図 14】コミュニティ意識 因子 2「連帯・積極性」の学部・性別ごとの因子得点平均



【図 15】コミュニティ意識 因子 3「他者依頼」の学部・性別ごとの因子得点平均

## 8. 結びにかえて —新入生調査の意義とデータの活用の方角性—

本稿では、北九州市立大学における新入生の特徴を、入学時に実施した調査のいくつかの項目に基づいて、学部・学群と性別の差に注目して検討してきた。ここで検討したのは、大学への進学動機、将来の職業に対する考え方、地域コミュニティに対する意識である。これらの項目を学部・学群間で比較することで、それぞれの学部・学群に入学してきた学生の特徴をある程度とらえることができた。詳細は本文に譲るとして、分析全体を俯瞰してみれば、それぞれの学部・学群の教育内容や社会的な認知のされ方、実際に学生に接した印象と概ね一致した結果が得られたように思う。その意味では、ここでの分析は感覚的にとらえていた学生の特徴を、データに基づいて確認する作業であったといえる。では、ここで得られた知見をどのように活用できるのだろうか。ここではこの点について若干の議論を行い、本稿の結びにかえたい。

ここでの分析に利用したデータは、調査企画の段階で全く意図されていなかったわけではないが、このような分析を行うことを主な目的として収集されたわけではない。しかし、進学動機や職業志向など、利用可能なデータからだけでも学生の意識や学部・学群ごとの特徴をそれなりに捉えることができた。新入生に限らず、学生の価値観や学習に対する態度、職業に対する意識など、学生の基礎的な情報を大学として把握することは、最近注目されている IR (Institutional Research) の観点からも重要である。具体的な課題の有無に関わらず、大学運営における基礎資料の1つとして、このようなデータの組織的な収集、蓄積、分析を継続的に実施する必要があるだろう。調査内容としてここで用いた進学動機や職業志向が必ずしも妥当だというわけではないが、本稿はこうした学生調査の有用性や今後に向けた手がかりをいくつか示すことができたと思う。

しかし、新入生の特徴をデータから把握することは有益だとしても、そこに目的がなければ知見を有効に利用することはできない。その意味では、ここで示した分析結果そのものはデータの概要を記述的に示したにすぎず、データの活用のためにはそれぞれの関心に依じてより踏み込んだ分析や追加的な調査が必要である。その活用のあり方の1例として、ここではアドミッションポリシーの検証を挙げたい。アドミッションポリシーでは、大学ないしは各学部・学群が受け入れようとする学生像が示され、そのポリシーは入試広報によって受験生に伝えられ、入試によって

ポリシーに適合する学生が選抜される。新入生調査は、このアドミッションポリシーと入試のあり方の検証などのために情報を提供することができるかもしれない。

例えば、地域創生学群における AO 入試のアドミッションポリシーは、「地域創生学群の理念や目的に特に共感した意欲ある学生の選抜を目的とします。そのため、意欲とともに、地域に働きかけていくときに必須となる理解力、思考力、コミュニケーション力など総合的な人間力の達成度を選抜の際の重要な基準としています」となっている。本稿では地域コミュニティに対する意識について分析を行ったが、そこでは地域創生学群の学生において地域に対する積極性や連帯の意識が他の学部よりも明らかに強いことが観察された。この結果から直ちに結論付けるわけにはいかないが、地域創生学群のこうした新入生の特徴は、アドミッションポリシーや学群の教育理念が受験生に理解され、ポリシーに沿った入学者の選抜が行われていることを示す1つの根拠となりうる。

今回の調査では、地域創生学群のアドミッションポリシーを検討しうる項目がたまたま含まれていたが、アドミッションポリシーの検証という目的は新入生調査の1つの方向性である。アドミッションポリシーを検証するためには、そのポリシーに沿って学生募集と選抜をした結果、どのような意識や態度を持った学生が入学するのかを議論し、調査でどのように検証すべきかを検討していく必要がある。絶対的な評価は難しいが、学部・学群間比較によって各学部・学群のアドミッションポリシーに沿った特徴が相対的に観察されるだけでも、貴重な検証の材料といえるだろう。またこのような検証方法を念頭に置くことで、アドミッションポリシーそのものについても、検証可能性を考慮して議論する必要も生じてくるだろう。新入生に対するアンケートだけでポリシーを十分に検証することはできないが、検証の1つの材料は得られるだろうし、そうしたポリシーの検証を念頭に置くことで、理念的で抽象性の高いものになりがちなアドミッションポリシーを、より実質的な内容にしていくための議論にもつながる。

新入生調査をアドミッションポリシーの検証と関連付けて位置づけるのは、新入生調査の活用の1つのあり方であるが、新たに入学してきた学生の特徴を入口の段階で把握することは、これ以外の様々な場面でもやはり重要だろう。近年では多様な入試形態があるため、学力のみが入学者の選抜基準ではないが、入試での選抜は受験生の限られた側面を評価しているに過ぎない。大学は、学力基準を中心とした入試によって測定される部分以外に、新入生に関する情報をあまり持っていない。

そのような中で、アドミッションポリシーと入試のあり方や大学の社会的な立ち位置についての検証、教育の展開や改善、学生の学業や課外活動に対する姿勢、卒業後の就職に対する意識や態度の把握、卒業時の教育成果の検証など様々な目的のために、大学は基本的な情報として学生の状況を把握することが必要である。

ここでは副次的に得られたデータから新入生の特徴のいくつかの側面について分析したが、本来的にはこのような調査は組織的かつ体系的に企画、実施されなければならないものである。新入生アンケートに限らず、学生の状況を客観的に把握し可視化することは、今日の大学に強く求められている。その1つのツールが学生調査である。そのあり方や改善に、本稿の分析や議論が資することを期待したい。

## 参考文献

- 石盛真徳・岡本卓也・加藤潤三（2013）「コミュニティ意識（短縮版）の開発」『実験社会心理学研究』日本グループ・ダイナミクス学会、53、pp. 22-29。
- 西出崇・山崎美美子・浅羽修丈（2015）「大学進学動機にみる北九州市立大学の新入生の特徴」『基盤教育センター紀要』北九州市立大学基盤教育センター、23号、pp. 49-66。
- 西出崇（2016）「地方部における若年層の居住地選択志向に対する都会イメージおよび価値観の影響」『政策科学』立命館大学政策科学会、23(4)、pp. 159-177。
- 古市裕一（1993）「大学生の大学進学動機と価値意識」『進路指導研究』日本キャリア教育学会、14、pp. 1-7。

